

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 5 4 号

2023 年 6 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第 2 の手紙講解説教」より (10)

弱きを誇る

この箇所〔コリント後書第 12 章 1-10 節〕は、……パウロの誇りの絶頂に達する場所にあたります。「弱きを誇る」ということは、前回から出ておりますが、その意味をより一層詳しく説明した場所であります。私は、これは誠に、聖書のクライマックスの一つであると思います。私、音楽は良く分かりませんが、ヴァイオリンを聞くのが好きです。何も知らない者でも、ヴァイオリンの高い音は、何とも言えない美しい音色であります。パウロの書簡をこのヴァイオリンの曲にたとえましたならば、パウロの数十年に渡る天歳が音の極みを発している場所にあたるように思われます。我々は数十年間も信仰について聞いておりましても、こういう音色が分かりません。音楽は、分からなくとも美しいと感じますが、霊のことにかけては、高い音を聞いてもピンと来ません。そればかりかむしろ、一つのパラドックス (矛盾) として聞いているにすぎず、本

当に我々の生命となりません。我々聖書を学ぶ以上は、こういう所が、我々の生命から香りとして出るように、信仰生活が高まりたいと思います。我々が自分中心に自己を振りまわしている間は、こういう音色は出てこない。我々はキリスト教を勉強すると言いますが、大体、自分の勉強を繰り返しているに過ぎず、何年やっても、いい音は出ません。どうぞ皆さんもパウロの、ヴァイオリンのような美しい音色を聞いて頂きたい。みなさんが自分の経験において、これをわが物にして頂きたいと思います。

自分に頼っているか、神に頼っているか

「しかし、わたし自身については、自分の弱さ以外には誇ることをすまい。」

(コリントⅡ 12.5)

[コリント後書第12章] 1, 5, 6, 9 節に「誇る」という字が出て来ますが、5, 9, 10 節において、自分の弱いところに神の恵みが加わったことを誇る、とあります。この「弱さ」「神の力」「誇り」は音楽のハーモニーのように、言うに言われぬ微妙な音色を奏でておりまして、これが分からなければ、クリスチャンとは言えません。これがかなめであります。自分に頼っているか、神に頼っているか、これが分かれ目であります。我々はクリスチャンである、と言って、大体自分に頼っています。自分に頼っている間は、何年経ってもものになりません。このパウロの弱さ、神の恵み、誇りについて、幾分か理解できたときに、始めて福音の意義が分かることとなります。

パウロの説教とその内容、彼の生涯を知る必要がある

〔コリント後書 12 章 6 節で〕パウロは、自分の啓示についてもっと語ってもよいのであるが差し控えようと言っています。これで分かるように、パウロは自分について誇ることは嫌いでした。自分の生活、行なった事、説教したこと、そのことによって私を判断して欲しい。自分が啓示を受けたことによって、私を買いかぶらないように。私はそういうことをもう語りたくない、と言っているのです。我々はもう少し聖書にあらわれたパウロの説教とその内容、彼の生涯を知る必要があります。彼の負った患難の大きさ、それに打ち克った力の秘密がどこにあるのかについて、真剣に聖書を学ぶ必要があります。聖書の真理と自分の生活がばらばらになっています。ただ、日曜日に話を聞いているだけです。そして 20 年、30 年やったから、自分は信者であると思っているのは、甚だしい誤解であります。自分の説いていることと自分の生活とを検討してもらいたいと、パウロは言いました。伝道者はかくありたいと思います。

私の力は弱いところに完全にあらわれる

「主が言われた。「私の恵みはあなたに対して充分である。私の力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。」(コリントⅡ 12. 9-10)

パウロはその「とげ」に堪えかねて、主イエス・キリストに対してこれを取り除くように3度祈りました。イエスがゲッセマネの丘で、「この杯を取り去りたまえ」と3度祈った如く、パウロはイエスに懇願しました。この「とげ」が伝道の邪魔になりますから、人間にとって当然のことと思われまゝ。しかし、イエスの返事は「私の恵みはあなたに充分である、神の力は弱いところに完成されるのである」と。この「十分である」、満ち足りるということは神から来ます。「神から来ている」は、本書簡の第3章5節にあります。ここにも出ています。自分の能力、努力では、満ち足りるところまでは来ません。キリストの力は、我々の弱いところに働いて、我々を強くして下さるのですから、私は自分の弱さを誇ろう。病気というものによって、神の力を知ることができるのだから、自分は病気を誇ろう。ここに我々の注目すべきところがあります。我々はちょっとした逆境にも耐えられない。ところが、そのことをパウロは感謝する。そのことを通して、神を知り永遠を知るのだ、という。我々はここまでのたしななくとも、こういう味わい、こういう音を音を出さねばなりません。…キリスト教では、この世の問題に対して、永遠を持って来て解きます。

私が弱い時にこそ、私は強い

「だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、私が弱い時にこそ、私は強いからである」(コリントⅡ12・10)

私が弱い時にこそ、キリストの恵みが分かり、神が分かり、永遠が分かり、復活が分かると言っております。この世の生活に満ち足りて、復活が分かりますか。我々はもう少しパウロの書簡を勉強する必要があります。……

パウロは使徒行伝では5回、「黙示」のことについて述べております。「黙示」とか「啓示」というのは、その人の力、その人の値打ちや努力によっていません。神から賜物として来ています。これは大事です。私が想像するに、パウロは、この黙示については語りたくなかったのであろうと思います。コリントの人びとがパウロのことを使徒ではないと言い、パウロから逃げて行きそうになったため、自己の使徒職を弁明し、神からこのように「黙示」を受けたのである、と言わざるを得なかった。この黙示こそパウロの人生にとって最も神聖な時であったと思います。パウロほどはっきりと、死後の生活、永遠の生命、救いの内容について説明した使徒はいない。コリント前書15章の復活論は、パウロ独特の教えであり、ここにキリスト教の救いが根差しています。こういうキリスト教の根本的真理は、この黙示の時に示されたものと思います。

我々の弱さ、真の弱さを知る必要がある

この「黙示」を、自分の「とげ」「弱さ」にへばり付けた、というところに無限の音を感じます。人間の弱さ、苦しみ、悲しみには解き得ざるものはないということを黙示によって悟り、パウロはここで証明しております。パウロは、使徒職の弁明のためのみであれば、黙示については、隠していたと思います。しかし、自分を終生悩ました弱さ、病気というものに対して、これが即ち、黙示と関係があるということを言いたいがために、人間の弱さ、人間の悲しみ、苦しみを解き得るために、そして、自分の説く福音には、そういう力があることを証明せんがために、この「黙示」を語ったものと信じます。私は確信する。そしてパウロの語り方は、実に簡単にして、慎み深い。誠にパウロの謙遜さに頭が下がります。……我々は、このパウロの謙遜さを学ぶ必要があります。彼の書簡のすべての深い真理が、この時に神が語ったものであると私は思います。

要するに、我々の弱さ、真の弱さを知る必要があります。それは我々に聖霊が臨んだときに分かります。その時に我々は、キリストにあって、賜物である救いが如何に大事であるかが分かるのであります。このすくい、永遠の生命、復活の生命が分かった時に、いかなる困難にも打ち克つことの出来る力が与えられるのであります。我々は日々の生活にあって、このキリストによる力を知る者になりたいと思います。

とるに足りない者

〔コリント後書 12 章 11 節の〕「わたしは取るに足りない者だとしても」の「取るに足りない者」という字は非常に大切な言葉です。我々はみな取るに足る者であると思っています。特に金持ちと学者はそうしています。天理教の中山みきさんは、「学者と金持ちは後回し」と言いました。取るに足ると思っていたら信仰は分かりません。信仰が分かるためには、「私は本当に何物でもない」と分からされる必要があります。しかしこの点が難しく、この点でみんな引っかかっています。パウロは「私はとるに足りない者である」と、本当にそうしています。私達もこういう精神を聖霊によって教えてもらわねばなりません。キリスト教が他の人に伝わらないというのは、クリスチャンは自分が偉いと思っているからです。それでは駄目です。

質 素

私はある時、米国の富豪のご夫妻を葉山の阪井徳太郎先生の所にご案内したことがあります。そのご夫妻の服装は誠に質素なものでした。ワイシャツだけはきれいなものであったことを覚えておりますが、持ち物、履物を見ると実に質素でした。私はそれ以来、自分で金を出して着る物を買う欲がなくなりました。銀行の窓口でも、実に質素な人が金を預けに来ます。信仰もそうです。信仰を本当に持っている人は、持っているのか、持っていないのかわからないものです。信仰を得た最初の頃は、みんなパウロ先生になった如き態度をしています。パウロはキリストの富を持っているから、物ではなく、君ら自身を求めている、と言っています。君ら自身が福音を信じて、救われてもらいたいと。

第1の感想——「弱き時に強い」

「大使徒の印」は「弱き時に強い」ということです。自分の弱い時に、キリストの力が自分に働きます。これが信者の「しるし」であります。信者は一見、弱く見えますが、しかし強い。「われ弱き時に強し」、これは前講で学びました。このパウロの言葉が分かるまでは、キリスト教をやめたらいけません。大きな仕事、立派な仕事は、何もキリスト教の信仰がなくても出来ます。それは、本質的なものではありません。キリスト者でなければできないことは、弱き時に強いということです。教育、物質生活の改善、心理学の応用は必要と認めます。しかし「弱き時に強い」という「新しき創造」(new creation)は宗教の独壇場であります。この「しるし」を解せざる限り、キリスト教は分かりません。「新しき創造」とはコリント後書の言葉であります。

「誰でもキリストに在るならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」(コリントⅡ 第5章17節)

この言葉を知るだけでも、コリント後書を勉強する必要があると、私は信じます。これは、キリスト教独特のものであります。

第3の感想——献金の処分について

金というのは魔物です。金に対してどういう態度をとっているか、によって信仰が分かります。当教会における献金におきましても、その処分方法は、会計、役員会に任せておりますが、私は、君達の献金の1円に至るまで、全責任をもって注意してみております。私の責任において、いい加減に使ってはおりません。